青葉の橋躑躅の道

山岸　薫

今年もいつしか春を送り初夏のさわやかな氣節とはなつた。關西のとある會社のバスガールとして職分にいそしむ身の、暫らくの休暇を利用し、母の鄕里近き山の國甲州の觀光を志した。或日甲府驛に着いたのは雨の朝早くで、關西までも聞えて居る御嶽昇仙峽行のバスに身を投じた。バスは中々發車しない。雨はおさまつて雲はうすれ、乘客のたれもが心あせるさまに見受けられたが、耳朶の豐かな口元のしまつてかしこそうなバスガールが「どうも御待ち遠うさま、間もなく發車いたします、今しばらくの御辛抱を御願ひいたします」との挨拶を四、五回繰り返した。職域に在る身の心ならずも止むを得ない挨拶である。昨日までのありし我身にもつまされて思はず涙がこみあげて來た。そのうち超滿員となつたので漸く發車した。右に折れて行くうちに「右にあります大きな建物が中學校でございます」と朱唇から案内の第一聲が發せられた。左に右に折れて、「其の左の方が躑躅崎館趾でございます、御隙がありましたら古名將を偲ぶよすがに御一覽なされませ」少し進むと新築の旅館らしき家屋が數軒ある。「こゝは新興の溫泉地湯村と申します、昇仙峽の入口に當りまして旅のつかれを慰するもまた一興かと存じます、御歸りの節御案内致しませうか」と如才なく愛嬌振を見せて「右の窓から高く仰ぎますればこんもりとした峯が見へます、あれは日蓮上人に因緣の在る所で何んでも願ふことは聞き屆けらるるとの事でございます、何んなら私まで御話置き下されば御傳へ申し

ます」と更らにくすぐつたいやうな愛嬌を振りまいた。間もなく右に折れ一部落を過ぎ、右に山腰に沿ふて進む程に左の窓から一渓流が目に入る。「これは荒川と申しまして源を金華山奥千丈山に發し御嶽昇仙峽谷をつくつて七里の間を流れ市川大門で笛吹川に合し、更らに釜無川と合流三大急流の一である富士川となつて靜岡縣に入り海に注いて居るのでございます」次て「此邊から左の空高く遠く眺めますと八ケ岳連山が見られます、又眼を左に轉じますと富士の麗峯があざやかに仰がれますが、今日は何たる事でございますか雲深くとぢ込めて其姿の一部をも見られません、折角の御遊覽に情なき限りで、嘸かし御殘念のことと存じますが晴れて仰がるるまたの御遊覽を御樂しみに、之れも私にとりましてはつきせぬ御緣とまたの御目もじを心から御待ち申します」と客馴れた思はせ振を云つた。「御客様方のごたいくつしのぎに此邊でまずいながらも一つ甲州小唄を御耳に入れませう」甲斐はよい國よ、水晶の國よ、ナアエ、いつも曇らぬ、晴れてのどかな人ごころ、今夜も逢へるか、逢へぬやら、心細さに出て見ればあつちを向ひても山々、こつちを向いても山々、風に木の葉の音ばかり、富士の湖數へて七ツ、ナアエ七ツうつした朝な夕なのお月さま」と喉の良い所を聽かされたのでヤンヤの拍手も車内にあふれた。「コロンビヤの歌手も洗足だね」とだれかがほめた。「御客様方左の方を御覽下さいませ高い處から段々に小な田が澤山ございます、あれは千枚田と申しますが、まさか千枚はありませぬ、とにかく可成澤山の田がございます、それについて一の面白い御譚がございます、昔時一人の御百姓さんがありまして此處に小さな田を造りましたが一枚の田がどうしても見へません、でよく〳〵しらべましたら笠に隱れて見へなかつたと申すことでございます」と一くさりの神祕めいた物語をした。右の窓から白や赤や紫の躑躅が百花爛漫と咲き誇つて居る高臺が見られた。此處は甲府市水道の貯水池である。誰かが「これは水道か道理できれいにしてあるね」と一同を笑はせた。バスは愈々峽谷へと進んで長潭橋を渉り老松參差として仙境に入るの心

地する天神平に着いた。「此處でバスは終りであります、此處からがいよ〳〵昇仙峽谷の絶景が一歩々々と展開されます、どゆつり御遊覽下さいませ私は御歸りを此所で御待ち申して居ります」とバスガールは分れの言葉を以て私達を見送つた。乘客は三々五々左に溪流を眺め、右に山腰に沿ひ上流へ上流へと足を運ぶ。さすがに觀光道路としての縣の修理は行き屆いたものだと賞讃の胸をおどらせながら轉々として展開する佳景奇勝にまばたきもせず眼を移す。岩壁の間に深淵を湛ふる長潭を過ぎると大砲岩、不動瀧、猿岩、人面石、ラクダ岩、轆轤岩、富士石、傘松、臥龍松、五月雨岩、寒山拾得岩などが陸續として現はれ、柱狀節理材木を横に積み重ねたやうな登龍岩、路面を强く足踏みすれば鼓のやうな響のする天鼓林、ガマ岩、金勝峯、羅漢寺山、彌三郎岳を左方高く仰ぎつゝ、茶店に有名なソバを食するものもあつた。夢の松島には目もくれず、石門、覺圓峯、天狗岩、雪紅瀧、浮石、鏡石、ローソク岩等の奇勝に心を奪はれ、一杯の番茶に喉を潤して更らに勇氣を振ひ歩を進め岩の天井をくぐつて青葉の橋昇仙橋を渡り、斷崖絶壁の間、幅廣の白布を三段に懸けたるが如き飛瀑を見る。之れが卽ち仙娥瀧と稱せらるる大瀧である。暫時足を止めて瀧を見る。肌いさゝか冷さを感じたので踵を轉じて歸路につく。覺圓峯近き長田圓右衞門翁の頌碑は一瞥するの暇もなく一氣呵成に峽道を下り天神平でバスに乘つた。歸りを待つと約束したバスガールの姿は見えない殘念な思が胸に迫る。も一度アノ美聲で「御嶽戀しや谷間の紅葉、燃ゆる思を瀨にくだく、すねて寢たような巖の松に、唄で小鳥は日をくらす」との小唄の一節を唄はせたかつた。密雲低うたれたれど幸ひに雨とはならず半日の遊行を無事に過した。

○

甲府驛前で晝食をすまし、大月驛行のバスに便乘した。やがてバスは鋪裝された坦々たる道路を國鐵に沿ふて東の方向に走り出した。滿員の車内に交る唯一人の女性である私は職業意識をすてて只の旅客としての心持でバスガールの案内を聞く。「これから御案内致します、コースは八號國

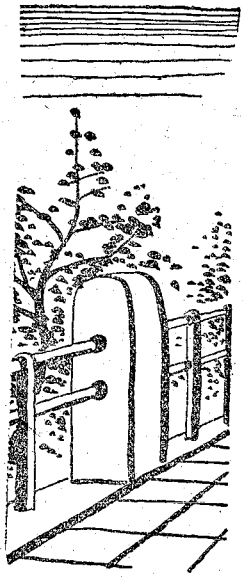
道と申しまして甲府から大月驛までの行程でございます、昭和五、六年度頃から十一年度まで改修工事が施されまして今ではこんな立派な道路になりました」と說明する。何處かで「その本家はこちらだ、くすぐつたいね」とささやきの聲がした。バスガールはこの半疊には氣もとめず「左の方ポストのある所から眞直ぐに山の方に見えます寺が善光寺でございます、これは昔武田信玄が信州から本尊を迎へ來て建立したお寺で國寶の佛體數基あります、又加藍莊然たる大古刹で長野の善光寺にも優つて居ると申されて居ります」一寸間をおいて「善光寺の隣に酒折の宮がございます、昔時日本武尊が御東征の歸路御坂山の嶮を越えて宿り給ふたといふ遺跡でございます」、やがてバスは一長橋を渉る。橋上で「此處を流れる川は笛吹川と申します、水源を國師嶽甲武信嶽に發し流れ流れて釜無川と合流し日本三大急流の一である富士川となつて海に注いでおります、昔時笛の名人が此川に身を投じたので笛吹川と呼ばるに至つたと申すことでございます」バスはやゝ南の方向に轉じ勾配もいささか急になる。午後は晴れとの氣象臺の豫報は全く裏切られて悪くや小雨は降り初めた。部落と桑園と青葉の山々とが車窓に映りては消へ、現はれては去る山の國の光景は深刻に展開されて來た。「此邊三里に亙りまして黑駒村と申します、昔時は隨分名馬が產出されたと傳へられて居ります、アノ左の方ソレ大きなトタン屋根の家が映畫に出ます黑駒の勝藏、清水次郎長の身內の有名な勝藏の生れた家でございます」「オイ車掌さん、此の窓はしまらないから雨が降り込む、何んとかならないかネ」と窓側の客が叫んだ。ニコ〳〵笑ひながら「おしめ申しませう」と客の間をぬいながら前方から後方へとやつて來た。前の客が「男の力でもしまらない、君ぢや駄目だろう」と言つたが、之は耳にもいらず氣にバスガールはその丸る〳〵と肥えた短かい腕を伸ばしてガラス戸に手をかけて動かした。戸はする〳〵と上部にあがりピタリと窓はしまつた。「矢張呼吸ものだね、調子がとれないと駄目だ、どうもありがとう」と客は言つた。バスガールは「イーエどうもすみませんでした」

と答へ、暫らく行くと、「改修前はこゝから眞直に上つたものでした、もう程なく下を御覽なさいませ蜒蜿として長蛇の如くに今登つて參りました道が見へます」と「成程凄いね、全くだ大蛇の横はつたやうな形だね」と客達は一同目をみ張つた。右に左に迂餘曲折、或は高く或は低く山腹を辿り、谷を越へ、古木苔むす林を縫ふて上るは上るは雲は山麓から湧き出でて視野を遮る。

バスは益々上り詰め、雨いよいよしげし。車は黑駒村境界の御坂隧道に入る。

隧道を出ると一茶店がある。バスガールが「此處で一休みいたしませう、此地點からは尤も端麗そのものの姿する富士山が見られます、美景と申しませうか、絶景と申しませうか、それは〳〵世界一の富士山と思はれます、今日はあいにくの雨で雲霧深くとざし視野極めて狹く何とも申し上げやうのない殘念なことで、折角の御遊覽もこれでは臺なしでございます、が御再遊の折を樂しんで御待ち申します、ここから西へ尾根傳ひに參りますと有名な黑岳に出ます、又東に行きますと三ツ峠で海拔千七百八十六米の頂上に立ち四顧しますと南アルプス、八ケ岳、秩父の連山、大菩薩、道志丹澤と廣く展望されまして全く天下一品で、夫れに此附近一帶は高原型の草原で高山植物が咲き亂れハクサンチドリを初め二百幾種に及んでおります、次の御遊覽には是非御案内致しませう」との説明を聞く。バスを下りて茶店に立ちより記念にもと繪はがきを購ひ、濃霧の彼方に富士の秀麗な姿を瞳の中に畫きながら再ひ車中に入る。年若き方がこれをと林檎を一つ。「思はずも未知の方から一箇の林檎、うれしきことのきわみにこそ」と手帖に記したのであつた。間もなくバスは發車した。此處からやや急勾配で下る。左の窓から三ツ峠の山容を雲霧の裡に模索しながら男性方の雜談に聞きふける。河口湖畔の一部落に入ると消防演習に出逢ふた。「此處が河口村でございます、只今消防の演習中でございますから徐行いたします」と間もなく湖畔に沿ふて船津村に出て暫時休憩。波靜かな河口湖面さかさふじを偲んだ。それから吉田、谷村を經て大月驛に着

いた。「此處が終點でございます、長い間、雨の中をさぞ御疲れのことと存じます、では失禮さしてもらひます、皆樣御機嫌よう」とバスガールの最後の挨拶を耳にのこし新宿行の乘車券を求めた。雨一日の觀光の旅、しかも唯一人異性の中に交り殆んど無言の行で終始すると共に同職のバスガールに同情を寄せながら、此旅行記を綴つた。青葉の橋、躑躅の道、清冽な溪谷、甲州は山の國谷の國であるが、實は歌の國詩の國である。



雜吟

巴藤

岩頭に釣する人や夏の霧
絶壁に青葉をもれて日の光
芍藥の莟におくや夏の露
赤に白に花散る丘や土筆摘む
五月雨やうねりくねりの藤の棚
闇の彼岸に螢招くはたれか兒ぞ
廢馬ひいて夏野の途を負傷兵
觀光の客は青葉の峽に入る
葉櫻や谷に臨みて蕎麥屋あり
初夏や猿渡る岨道眉に在り